

ラーメンを通じた日中史を執筆した英ケンブリッジ大准教授

バラック・クシュナーさん 44

Barak KUSHNER



顔

ラーメンの歴史を通じて日中関係を探る著作「スラープ！」を昨年10月、英国で出版、ラーメン人気が高まるロンドンで注目を集めている。題名は、麺をすする音を意味する英語だ。「ゲルメ本じゃないよ」と滑らかな日本語で語る。英語指導助手として米国から岩手県山田町に赴任した20代前半、日本語も魚介も苦手で戸惑っていた頃、同僚が深夜のラーメン屋に連れていってくれた。

酔いも手伝い、「このおいしい食べ物は何だ」と感激した。

この滞日体験を機に、日本史研究者となった。「大日本帝国のプロパガンダ」を研究しつつ、ラーメン史にも興味を持った。そこに日中関係が映し出されていたのだ。江戸時代、中国伝来のそばが流行していた。豚肉食の習慣がなかった鎖国中、長崎で中国人が豚肉を食べていたと知り、「九州豚骨のルーツでは」と推理した。構想から8年。著書は約300ページに膨らんだ。

緊張が続く今の日中関係については、「ラーメンは、日中交流史を詰め込んだ『小宇宙』。両国は長く良好な歴史を保ってきた」と遠観している。

（英ケンブリッジで 青木佐知子、写真も）